

からして、吉田の傍ら近くゐて、吉田と二人きりの世界にゐることが、又なく楽しかった。こんな時間が、永久につづいてくれればいいとさへ思った。

『明日は、慰問演藝會があるさうです。』

と、吉田が云つた。

美彌子は、感極まつてゐて、彼の言葉に返事することが出来なかつた。

『美彌子さん……』

吉田は、返事のない彼女を求めやうに、此方へ顔を振向けた。

『嬉しくつて……』

と、美彌子が云つた。

『何が……』

『かりして、吉田さんのお傍にゐるのが……貴君が戦地へいらつした後、時々こんな夢を見たわ。その時、貴君はどことも負傷していらつしやらなかつたけれど……』

『……』

吉田は、だまつて顔を、元の位置にもどすと、何か考へてゐるやうだつた。彼の胸の上に置い

た手の中にあるフリジヤは、時々クルリと廻つた。

『私、このまま一生こんなにして、ゐてもいいと思ふわ。吉田さんのお眼が癒ることを心からお祈りしてゐるけれど、もしこのまま失明なすたら私一生貴君の眼になつてもいいわ。』

と美彌子は思ひ切つて云つた。

『……』

『ねえ。吉田さん！』

と、吉田の答へを促した。

『いけません！ この間も、申し上げた通りです。』

と、吉田は低いが、強い調子で云つた。

『貴女は僕には勿體ないのです。以前も、さうでした。今はなほいけません。お義母さんを愛してゐた僕は、前科者ですもの……いけません。斷然いけません。』

吉田は、わが身わが心を強く責めるやうに云つた。

『……』

吉田の強い拒否に、美彌子は悲しくなつてだまつてしまつた。

「貴女には、健康な明るい結婚をしていただきたいのです。船田さんと云ふ人の事は僕は知らないが、お義母さんのお手紙では、随分立派な方のやうに、思つてゐます。その方と結婚なされば、亡くなつた先生も、貴女の生みのお母さんも、どんなにお悦びになるか分りません。」

「……………」

美彌子は、だまりつづけてゐた。

吉田は、見えぬ眼で、彼女の表情を知らうとしてゐた。

彼の心眼の上には、鮮かに若々しい美彌子の笑顔が浮びいやいやと子供のやうに、頭を振つてゐるやうに思はれた。

「ねえ……………」

と、悟すやうに、吉田は云つた。

「駄目だわ……………」

と、明るい美彌子の言葉だつた。

「私だつて、船田さんと結婚したいの。いく度も、結婚します……………」と云つて、返事しようとしたか分らないの……………それでゐて、いよいよとなると、思ひ切つて、返事が出来なかつたの……………私の

本當に、望む人が外にあるやうな氣がして仕方がなかつたの……………。貴君が負傷されたと聞いたとき、私初めて自分の生きる道が分つたやうな氣がしたの……………」

美彌子の聲は、他をはばかりて、私語に近かつたが、その聲はオルゴールから流れ出すやうに、低く優しく柔かであつた。

「こんな氣持で、船田さんと結婚することは、船田さんにすまないわ。一生、悪い奥さんになつてしまふんですもの……………」

と、美彌子は云ひつづけた。

先刻まで聞えてゐた室内樂が、いつか止まり、小鳥も轉らず、病室内は、しづかになつた。

吉田は、須磨子に對する氣持も、まだ整理し切れてゐなかつた。眼を閉づれば、須磨子の面影が、すぐ臉の裏に浮んで來るのであつた。だから、美彌子の至純な氣持は、身を切られるやうに辛かつた。

眼の裡が熱くなり、眼の傷が、うづくやうに思はれ、彼は鼻をつまらせた。

「美彌子さん！、それでは、かう云ふ約束にさせて下さいませんか。僕が幸ひに、失明を取り止めたら、貴女のことを考へさせて下さい。が、もし不幸にして、失明したら、どうか、僕の自由

にして下さい。僕は、貴女を失明した電家の傍になんか置きたくないんですから……」

「貴君が、失明なすつたら、いよいよ……」

「いや、僕の云ふ事を聞いて下さい……」

と、吉田は強く云ひはなつた。

美彌子は、その後も毎日のやりに病院へ通つた。行く度に、新聞や雑誌の記事を吉田のために讀んだ。お菓子や果實や、花を持つて行つた。

右眼の手術が行はれて、十日ばかり経つてから、左眼の手術が行はれた。面會が許されない日も美彌子は病院へ行き、係りの看護婦さんに會つて容體を訊いた。

看護婦さん達ともすつかり仲よしになつてしまつた。

三月の終のある日、今日こそ面會が許されるだらうと思ひ、病院へ行つて見ると、二階の階段の上り口で、上から降りて来る山口こいふ看護婦さんは、美彌子の顔を見ると、いきなり飛びつくやうに、肩に抱きついて來、

「立花さし！ お喜ひなさい！ 吉田伍長殿は、眼が見えましたよ……」
と、息をはずませながら云つた。

『まあ……』

美彌子は、山口さんに肩を叩かれ、上りかけた階段を、ふみはづしさうになつた。

『今朝、繻帯を替へるとき、貴女の、このあひだお持ちになつた赤い花が、ボンヤリ見えましたよ。』

『うれしい！』

と、美彌子は叫聲にちかい聲をあげると、山口さんと、からみ合ひながら、階段をかけあがつた。

急に、彼女の住む世界が、大轉回をなし、新しい陽の光が、頭上から、さんさんと降りそそいで来るやうな氣持だつた。

が、病室へはいつて見ると、吉田は、いつもと同じやうな姿勢で仰向きに寝て、耳にレシーバを當てて、何かを聴いてゐた。

美彌子は、悦びの聲を擧げたいのを、辛抱してそつとベッドに近づくと、

『おめでたう！ 吉田さん！』

と、耳に口を寄せて云つた。

白布に掩はれない吉田の頬の下部が、悲しみとも喜びとも判らぬ表情で、きれいしたが、吉田は何も云はなかつた。

『……………』

『吉田さん、おめでたう。私こんなうれしいことはないわ。生れて初めてよ、私うれしいわ。私すぐに死んでもいい位だわ。』

『……………』

吉田は何も云はなかつた。

『私、これで吉田さんのお傍に一生居られるのね。』

美彌子は勝ち誇つた駄々つ子のやうに云つた。

吉田は何か云はうとして、口をうごかさうとしたが、何も云へなかつた。

『吉田さん、貴君はお喜びにならないの……御自身のためにも、私のためにも……』

吉田の唇は、青白くふるへてゐたが、やつと思ひ切つたやうに……。

『僕は、眼が見えるやうになれば、美彌子さんを幸福にする自信が出来ると思つてゐました……が眼が見える希望の持てる今も、前と同じです。僕は、何も見えない時、僕の眼の中には、御尊

子さんの顔だけが浮んでゐました。僕は、それに依つて失明の寂しさも苦しきも、堪へしので来たのです……。その僕が……許して下さい……許して下さい……』と云つた。

女性本願下



不許複製

昭和二十年十一月十五日初版印刷
昭和二十年十一月二十日初版發行

(一〇、〇〇〇部)

定價一圓五十錢(稅込)

著者 菊池寬

發行者 東京都小石川區音羽町三丁目十九番地
高木義賢

印刷者 東京都江戸川區平井二丁目四百十番地
山根光次郎

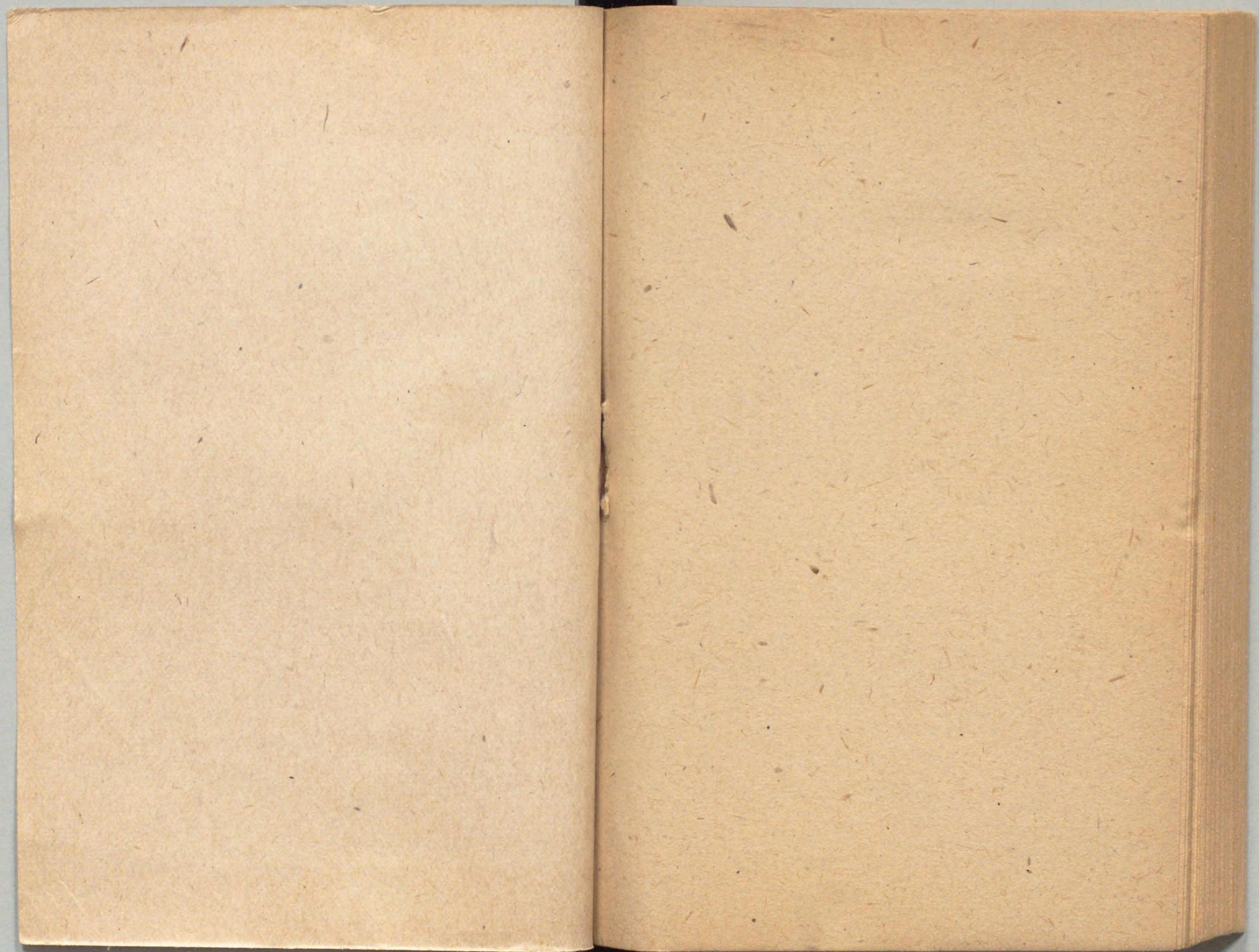
印刷所 東京都江戸川區平井二丁目四百十番地
東光印刷株式會社

發行所 東京都小石川區音羽町三丁目十九番地
株式會社 大日本雄辯會講談社

日本出版會會員番號三三〇〇八四

東光堂製本

配給元 日本出版會株式會社





講談社

